

「伝統を繋ぐ」

橘 秀 憲

謹んで新春のお慶びを申し上げます。本年も何卒よろしくお願いたします。

昨年の暮れの漢字は「輪」でした、支援の輪とかオリンピックの誘致をイメージしてのことだったと思います。オリンピックの誘致に関しては、安倍首相の福島原発事故の対応は十分進んでいるような発言が気になっていましたが、日本人の中でもやはり首をかしげていた人がいたと思います。本当に復興支援が進んでいるのか、被災地から離れていることもあり、また発信される情報量のこともあるかもしれませんが、本当に対応できているとは思えないし、オリンピックの開催決定で、さらに支援体制が遅れないか懸念されます。東京の交通網も前回のオリンピックの折に整備されたものが多いらしく、老朽化が指摘されていますからオリンピックに向けて交通網の整備が優先されていくことがあるかも知れません。生まれた土地を離れ、戻ることができないところ・人があり、永年培った伝統や歴史も途切れてしまいます。7年後とは言っても当然復興支援・福島原発事故の対応が先という、優先順位は決まっていると思います。被災地のこと・人を忘れないでいたいと思います。

話は変わりますが、伝統を繋ぐということでは、岐阜県内の明宝地域で葬儀の折のお齋を継承する取り組みが新聞に載っていましたが、伝統ある報恩講のお齋も各御寺院で伝統されてきましたが中々時代の流れでしょうか、崩れてきていることをお聞きします。お齋は法事・仏事後の食事ですが、参会者が一堂に会して共に亡き人を偲んだり、教えに出会う一つの場です。いのちを戴くことを共に共有し確認した場であったのでしょうか。葬儀においては急なことであっても、大切な人から死というものを知らされる場で近隣の人たちが準備を進める体制ができていたと思います。お手伝いをする中で次は「自分の番だ」という思いで立ち会ったということを知ることがあります。そうして伝統されてきたのです。報恩講においては、その日に合わせて材料を数日前から持ち寄り、煮炊きをして準備します。当番は持ち回りで引き継がれてきたものでした。また地域によっては「いとこ煮」「小豆粥」といった宗祖が好きだったと言われる材料による伝統料理も伝えられています。お金を出せばどうにでもなる時代だからこそ、こういう手間や労力をかけて教えを聴きに來られる方々をお迎えするというそういう伝統をやはり大切にしていきたいものです。豊かな社会を創り上げてきた中で、逆にいのちを見つめるそういう場がなくなり、人と人との繋がりも希薄になる、失ってきたものも大きい気がします。

「お相伴」という言葉があります、仏事でお出されたお齋は残さず持ち帰り、家族みんなに等しく切り分けて「お相伴」だといっていたらと、特に報恩講のお齋の主賓は親鸞聖人であり、御影にお供えした後、その「お相伴」としていただいたということのようです。食べ物は生きていく上で欠くことのできないものであります。このような仏事を通して生かされて生きていくことを互いに確認していたようです、今では使われないかもしれませんが、この「お相伴」の精神も大切にしたいものです。伝える、伝統を繋いでいく、また無くしていくのは誰でもない、この私であることを気づかされるこの頃です。